

藤波太圓 谷内正順 木場了本 藤岡了淳
橋川 正 細川憲壽 太田 力

會員二名以上の推薦に依り隨時入會を歓迎す。

七星會

本會は初め史蹟踏査會と稱し、橋川教授を中心に、學部學生を以つて組織した居たのであるが、今春七星會と改名し單に史蹟踏査のみならず、廣く史學の研究會をなし、專問部、豫科の有志者をも會員にする事にした。

□鞍馬寺見學 昨年十一月末、皇后陛下が同寺へ行啓されたので、陛下の行啓後二三日間、一般に寶物を拜觀せしめたので、好期逸す可らずと云ふので、急に十一月廿八日に同寺を見學をした。突然であつた爲、人員は少なかつたが、橋川教授の懇切な説明と同寺の丁寧な待遇とは共に甚だ有難かつた。尙同寺の歴史、寶物等は近く出版さる可き鞍馬寺史（橋川教授著）に詳しく出て居る。

□太泰寺見學 十二月七日、晴朗な初冬の一日を太泰寺に送つた。來會者廿餘名。彫刻及び古文書に注意す可きものが多かつた。同寺は南北朝時代に、鞍馬寺が南朝方であつたのに對し、此は北朝方であつ

た。其で古文書に見える同じ兎徒と云ふ語が、鞍馬寺のものは北朝を意味し、太泰寺のものは南朝方を指して居る等は、又深き興味を生ぜしめた。同日講師橋川教授。歸途妙心寺を見學した。

□西本願寺見學 一月十八日午後一時から、四時間餘同寺に於いて、雄大な桃山時代の繪畫彫刻を觀賞した。尙當日は橋川教授の紹介で、禿氏龍大教授が説明して下さつた。（T生記）

最近佛教研究論文（大正十三年自九月至十二月）

（A） 原典研究

法華部大觀（上）	本多 日生	倫理講演集	二六五
撰時鈔抄出略註	小林 一耶	法華	二九六
大智度論の古本に就いて	禿氏 祐祥	龍大論叢	二四七
密友書の研究	本田 義英	龍大論叢	二四七
十住毘婆沙論小論攻	龜川 敦信	龍大論叢	二五七
蓮社高賢傳に對する疑義	佐々木功成	龍大論叢	二五七
英譯「阿彌陀經」	宇津木二秀	龍大論叢	二四七
佛典の民衆化	深浦 正文	宗教と思想	二ノ三
梵文楞伽經を讀みて	泉 芳城	宗教と思想	二ノ三
法華經史上に於ける龍樹（上）	本田義英	宗教研究	一ノ二

(B) 教理及教理史研究

佛教道德に就いて

常盤 大定 倫理講演集

二六四

印度佛教末期に於ける因明の夕陽

岡 教達 哲學雜誌

三〇ノ十

道教と眞言密教との關係を論じて修驗道に及ぶ

小柳司氣太 同

三〇ノ八九

法藏菩薩と釋尊の關係

寺本 婉雅 宗教と思想

二〇ノ二

禪天魔

前田 利鏤 講座

二二

阿彌陀佛と壽量本佛に對する考察の一斷面

高田 惠忍 法華

二二ノ十

本章に於ける教觀、順逆、種脱の諸問題

高田 惠忍 法華

二二ノ九

一切衆生悉有佛性

大谷 光瑞 大乘

三〇ノ十

親鸞聖人の淨土七祖觀

脇谷 橋謙 同

三〇ノ十

小乗より大乘へ

松本文三郎 宗教研究

一〇ノ二

朝鮮佛教史

李 龍和 朝鮮史講座

二五ノ七

眞言密教より見たる龍樹菩薩

松永有見 龍大論叢

二五ノ七

支那佛教思想の成立

佐藤 泰舜 觀相

十

佛教に於ける倫理實踐哲學の起原

渡邊 樸雄 宗教研究

一〇ノ二

佛教に於ける平等原理

佐藤 泰舜 同

一〇ノ二

三徳山誌

井尻 進 大乘

三〇ノ二

(C) 教會研究

三徳山誌

井尻 進 大乘

三〇ノ二

最近佛教研究論文一覽

大乘國としての日本

小林 一郎 法華

二〇ノ九

北米佛教の危機

藤井 龍智 宗教と思想

二〇ノ三

印度佛教史上に於ける龍樹の地位

松本文三郎 龍大論叢

二五ノ七

(D) 傳記研究

宗教改革者としての法然

矢吹 慶輝 宗教と思想

二〇ノ三

親鸞とルツテル

谷本 富 同

二〇ノ三

立正大師詩傳

高田 惠忍 法華

二〇ノ十

道元禪師の宗教改革說

中里 龍雄 觀想

九

(E) 藝術、地理及考古學研究

印度の宗教藝術

手島 文倉 宗教研究

一〇ノ二

佛像淚

豐田 豐 宗教と思想

二〇ノ十

(F) 雜論

藏經中に現れたる動物について

罕 伯眞 大乘

三〇ノ二

修學の態度に於ける善財童子と親鸞聖人と吾等

小野 正康 觀想

二

凡人の道

金子 聽斧 觀想

二

宗教は果して社會的成立を爲すや

茂野 哲雄 觀想

二〇